

### 3. 丹後半島・古代山寺の巡見

菱田 哲郎・溝口 泰久・山内 愛弓

#### 1. はじめに

令和 4 年度より科学研究費補助金（基盤研究 B）の交付を受けて、「古代後半期の山寺の総合的探索にもとづく仏教浸透過程の研究」（22H00720）に取り組むこととなった。これまで丹後地域での山寺探索に従事してきた経緯もあり、今年度は広く丹後の山寺を分野横断的に検討することとした。歴史学、考古学に美術史、建築史、歴史地理学、民俗学などの分野の研究者が加わり、ともに寺院跡や関係の史資料に触れ、総合的に寺院の歴史や特徴をあぶり出すことを目的とする。今回の巡見には、これまで丹後の山寺研究に従事してきた奥谷三穂氏や丹後ひくやま会のメンバーの案内のもと、科研のメンバーが地元の文化財関係者とともによくつかの寺院についてともに検討をおこなうことができた。巡見にあたっては、伊根町寺領区のみなさん、縁城寺・上山寺住職今村祐恵氏、洞養寺住職村上弘明氏、同寺総代表田畑佐一郎氏、京丹後市教育委員会、宮津市教育委員会、京都府立丹後郷土資料館にたいへんお世話になった。記して謝意を表する次第である。（菱田哲郎）

#### 2. 巡見の概要

2022 年 11 月 14 日に、巡見に先立つ研究会を実施した。研究会では、村上孟謙氏、稲穂将士氏、新谷勝行氏より丹後の山寺についての報告があり、事前に巡見先への理解を深めた。

巡見は 2022 年 12 月 4～5 日に実施した。菱田哲郎・上杉和央・井上直樹・岸泰子・中村治・山岸常人・奥谷三穂・小林 楓・溝口泰久・山内愛弓（京都府立大学）、吉川真司・村上孟謙（京都大学）、藤原穰（大阪大学）、および地元から梅田肇・坪倉良夫・平井真二（丹後ひくやま会）、今村祐恵（縁城寺）、稲穂将士（京都府立丹後郷土資料館）、河森一浩（宮津市教育委員会）、新谷勝行（京丹後市教育委員会）が参加した。訪問先の各地では各自治体の教育委員会の方々、丹後ひくやま会や住職など地元の方々に案内・解説のご高配を賜った。

4 日はまず、伊根町寺領地区恩教寺跡（京都府与謝郡伊根町）にて寺領区出身の方の立会いのもと、現地調査をした。観音堂の建築調査や石造物群の調査をおこなったほか、観音堂周辺の地形の把握に努め、参道との関係性から現存する観音堂より地形的に本堂が想定されそうな平坦面などを確認した。寺領地区元公民館では地藏菩薩の調査をおこなった。次に上山寺（京都府京丹後市丹後町）にて上山寺住職を兼任する今村氏の案内のもと、本堂の建築調査を



写真 1 寺領観音堂の調査



写真2 洞養寺行者堂の調査

実施し、そのほか五輪塔や宝篋印塔、板碑などを実見した。また、付近の上山寺歴代住職のものとされる墓石が群集する墓地を確認した。その後、此代石仏群と安楽寺（京丹後市丹後町）を視察した。京丹後市立丹後古代の里資料館（京丹後市丹後町）では新谷氏の案内のもと、館内展示されている上山寺の十一面観音像と棟札を調査した。

5日は縁城寺（京丹後市峰山町）にて縁城寺住職から寺院の由縁や本尊などについてご説明をいただき、本堂や宝篋印塔を視察した。その後、新谷氏より縁城寺背後の山中に位置する10世紀以前の遺物が出土した縁城寺旧境内隣接地遺跡を案内・説明していただき、現境内から発掘調査地点に至る道中では、平坦面や旧道のほか、『縁城寺院坊抱地配分諸書及絵図面（寛文12年（1672））』に残る多宝塔の跡地などを確認した。次に洞養寺（京丹後市弥栄町）では洞養寺住職・総代の立会いのもと、本堂や阿弥陀如来、役行者像を視察した。その後、成相聖観音や慈眼寺を視察した。河森氏の案内のもと、かつて寺院境内が存在した安国寺遺跡の発掘調査現場を見学した。また、京都府教育委員会の桐井理輝氏の案内のもと、丹後国分寺跡の発掘調査現場を見学した。そして、京都府立丹後郷土資料館（京都府宮津市国分）にて「特別展 祈りのカタチ—丹後に生きた人々の願い」を見学し、丹後地域における通史的な信仰のあり方についての理解を深めた。（山内愛弓）

### 3. 山寺の巡見を通じて

考古学の視点による山寺調査は、地形の観察により遺構の存在が有力とみられる地点での遺物探索が成果を上げるための糸口となる。今回の巡見以前から丹後半島をフィールドとして山寺踏査を経験してきたが、未だ決定打となるような遺物の発見には至ってはいない。山寺は一般の集落遺跡のように物資に溢れた性格の場ではなく本来的に遺物が少ないことがその一因として挙げられ、考古学的手法のみで山寺に迫る困難さを感じた。一方で、寺院の構成要素の核となる仏像は信仰の対象として当初とは異なる寺院に移動し存続しえる。寺院の創建より仏像の年代の方が古いケースもあるようで、山寺との関係性が縁起などにより推測される場合には付近に山寺の存在を想定することができる。今回訪れた縁城寺についても仏像は現位置での堂宇の築造年代を遡って製作されたものとみられる。縁城寺旧境内隣接地遺跡では発掘調査により現境内の本堂より年代の遡る遺物と建物跡が確認されており、このような年代が古く見積もられる仏像の存在を留意すると寺院の来歴を考える上で非常に重要な意味をもつ。

今回の巡見では、複雑な構成要素からなる仏教寺院を、議論を深めながら総合的な視点をもって巡見することができ、非常に有意義であったと考える。山寺の調査において各学問分野の相互的な検討を議論することで理解が一層深まることを実感することができた。このような検討が全国的には進展していない古代山寺の研究を推し進めることにつながると思われる。そのための基礎作りとして地道な調査を継続していく意義を今回改めて認識した。（溝口泰久）

#### 編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱い、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

---

京都府立大学文学部歴史学科

## フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2

---